

■知的支援学校における実践事例

知的な遅れがある子どもたちにも読書の楽しさを！ —学校図書館オリエンテーションでの活用を通して

鳥取大学附属特別支援学校
児島 陽子・入川 加代子

はじめに

知的な遅れがあると、文字が読めなかったり、本の内容が理解できなかったりすることから、知的障害教育において、“読書はむずかしい”と思われてきた経過があり、学校図書館活動は全国的に低調です。

しかし、鳥取大学附属特別支援学校では、「知的な遅れがある子どもたちにも読書の楽しさを伝えたい」との思いから、その活動の拠点である学校図書館の充実を図っています。障害があろうとなかろうと、子どもたちにとって、読書は想像力や言葉を育てる重要な活動であり、知的な遅れがあるということで読書環境に格差があってはならないと考えています。

本校では今年度、校舎の全面改修が行われ、それに伴い学校図書館も木の温もりのある素敵な図書館にリニューアルしました。図書館には、

時間数は少ないながらも学校司書がいて、日々、図書の貸し出し業務や生徒たち、教師からのリクエスト、レファレンスに対応しており、昼休みの時間帯を中心に、図書館は子どもたちでにぎわっています。





研究の目的

知的な遅れがあるため活字のみの図書では、読書の楽しさを味わえない子どもたちがたくさんいます。子どもたちの発達年齢や障害特性、さらには生活年齢を大切に資料を学校図書館に整備することが大切です。

その一つとして、4年前から学校図書館にマルチメディアDAISY図書を配架し、専用のパソコンも設置しています。

また、全職員に向けて、マルチメディアDAISY図書の紹介を行い、使い方を説明してiPadの貸し出しも行っています。

しかし、特定の教師の活用はあるものの、まだ教職員全体に活用が広がっているとは言えません。また、マルチメディアDAISY図書を学校図書館に揃え、並べただけでは決して子どもたちにも活用されません。個々の読書のニーズを把握し、そのニーズに応じて、どのようにマルチメディ

アDAISY図書を活用すればよいか、その橋渡しをする「人」の存在なくしては、有効活用されないと考えています。

前回の研究でも、まず校内で教職員の理解を得ることが一番の課題であると報告しました。そこで、マルチメディアDAISY図書を図書館オリエンテーションの授業の中で活用し、実際にすべての子どもたちや教職員に知ってもらうこと、そして子どもたちの反応や様子を知ること、教職員にはその可能性や感想を聞くことを今回の研究の目的としました。

研究の準備

(1) 学校図書館のリニューアルに伴い、すべての学級に図書館オリエンテーションの時間を設定しました。図書館で、図書館の使い方やきまりなどとともに、図書館資料の一つとして、マルチメディアDAISY図書を大型スクリーンに投影し視聴することとしました。

(2) 各学級の実態に応じて、どのマルチメディアDAISY図書を視聴するかを司書教諭が担任と相談して決定しました。

また、一部のマルチメディアDAISY図書については、実際の絵本を実物投影機でスクリーンに投影しながら司書教諭が読み聞かせを行い、

マルチメディアDAISY図書での読書と比較することとしました。

(3) マルチメディアDAISY図書について、その活用の仕方の可能性や子どもたちの様子などについて、先生方に記入してもらうようにアンケートを準備しました。

活用の実際

本校の学級数は合計9学級です。生活年齢や発達年齢、興味関心等を考慮して、次のようなマルチメディアDAISY図書を視聴しました。学級（人数）、使用したマルチメディアDAISY図書の順に記述します。

●小学部1・2組（7名）

『わたしのワンピース』『やおやさん』（わいわい文庫）

●中学部1年（6名）

『ヘスターと魔女』（わいわい文庫）

●中学部2年（5名）

『てぶくろ』（日本障害者リハビリテーション協会 ※以下、リハ協と表記）

●中学部3年（5名）

『やおやさん』『11ぴきのねこ』（わいわい文庫）

●高等部1年（7名）

『蜘蛛の糸』（リハ協）

●高等部2年（8名）

『モチモチの木』（リハ協）、『相撲シリーズ』（わいわい文庫）

●高等部3年（9名）

『王さまと九人のきょうだい』（わいわい文庫）

●専攻科（7名）

『蜘蛛の糸』（リハ協）

その時の子どもたちの様子や先生方の感想などを一部紹介したいと思います。

(1) 小学部1・2組

『やおやさん』『わたしのワンピース』

1年が1名、4年が1名、5年が2名、6年が3名という合計7名の集団で、発達年齢も生活年齢もともに幅がある集団です。

読書に関しては、すらすらと活字が読める子どもやまだ拾い読みの段階の子ども、文字はまだ読めませんが、音声の模倣でやっと発語が出てきた子どもとさまざまです。集中力も長くは続かないため、短時間のものです。絵や写真を見ながら単純な繰り返しで進んでいく話がよいと考え、『わたしのワンピース』を、まだ拾い読みですが、少し単語のかたまりも意識して読んでほしい子どものために『やおやさん』を選びました。

『わたしのワンピース』では、まだ拾い読み段階の子どもがハイライトされる文字を見ながら一緒に声を出して読みはじめる場面が見られました。

また、『やおやさん』では、音声に合わせて教師が口形を目の前でして

見せると、やっと発語が出はじめた子どもが、それを見て模倣して発声し始める場面も見られ、主体的に読み聞かせを楽しむ姿が見られました。

【担任の先生方より】

- 子どもたちの反応がよく、『やおやさん』は、一音ずつ読み上げすることで、発声を促すことができ、楽しみながら学習ができる。
- 『わたしのワンピース』は、挿絵に合わせて、短い文を子ども自身も一緒に読んだり、耳で聞くことで、イメージを広げたりすることができると感じた。
- 文字が黄色にハイライトされるのを見ながら、音声に合わせて読んでいる姿があった。読みの練習などに使いたい。
- 学級での読み聞かせに使えると思う。
- 子どもがとてもうれしそうに見ていたのが印象的だった。
- どの子どもも楽しんで活用できる教材だと思う。積極的に活用したいと思いつつできていないのが現状だ。タブレットを借りてやってみたい。
- 自分で操作しながら読みすすめる方法で活用したい。
- 今日見せていただいたものは文字が小さかったので、文字を大きく

教科書のようにして文字と音声とを一致させながら見るができると思う。発達レベルによって、活用の仕方はいろいろあるかなと思う。

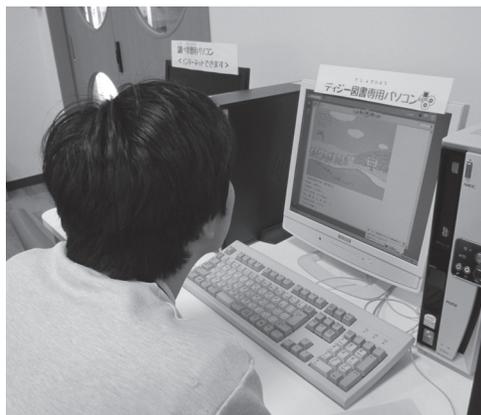
△個別学習に使えるかもしれないが、パソコンを教室に持ち込むなどの規制がある。

(2) 中学部2年

『11ぴきのねこ』『やおやさん』

中学部2年は、発達年齢にかなりの幅がある5名の集団です。読書に関しては、活字のみの小説を読む子どもや、絵や写真が入ったキャラクター本に興味がある子ども、一文字一文字なら読めますが、まだかたまりを意識しては読めない子どもとさまざまです。

そこで、生活年齢も大事にしながら、話のおもしろさ（最後のオチ）が伝わり、キャラクターが登場して親しめるような話をと考え、『11ぴきのねこ』（紙芝居風）を選びました。



また、文字のかたまりを意識して読んでほしい子どものために、「こんな楽しい資料もあるよ」と紹介を兼ねて、『やおやさん』も視聴しました。

視聴した後で、本校図書館にある『11ぴきのねこ』シリーズの絵本やマルチメディアDAISY図書も紹介しました。

A君は、話の内容や最後のオチの意味もわかり、「おもしろかったです。今日、その本をぼく借ります」と言って、昼休みにさっそく図書館で、『11ぴきのねことぶた』『11ぴきのねことあほうどり』の本を借りて帰りました。

後日、さらに司書の先生にリクエストして、県立図書館から『11ぴきのねこマラソン大会』を取り寄せてもらいました。こうしてマルチメディアDAISY図書の視聴をきっかけに、A君は『11ぴきのねこ』シリーズにはまり、昼休みもマルチメディアDAISY図書『11ぴきのねこ ふくろのなか』を一人で視聴する姿も見られました。

『やおやさん』の視聴では、ふだん一文字ずつ文字を読んでいるBさんが、一斉に声がする場面で笑い声をあげて楽しんでいる姿も見られました。

【担任の先生方より】

○『やおやさん』『11ぴきのねこ』のいずれについても、子どもたち全

員が興味深く視聴していて楽しんでいました。

○映像から入ることで、子どもが興味をもちやすい。子どもの興味を引きつけて、効果的に学習を進められると思う。

○現物の絵本ともビデオ教材とも違う特性があると思うので、特に効果的な活用方法があるのではないかと思った。

○文字のかたまりを意識して読んでほしいので、『やおやさん』を課題の中で使ってみたい。

△使い方のマニュアルがあるとよい（あるのかもしれないが）と思った。

△種類が増えるといいと思う。特にやさいだけでなく、動物や食べ物など。

この後、担任教師がiPadを借りて、『やおやさん』をBさんの課題の時間に活用しています。Bさんは自分で操作しながら写真を見て、音声と同時にハイライトされる文字を一文字ずつ「な」「す」と読み、続いて「なす」と読んで楽しく文字を読む学習に取り組んでいます。



(3) 高等部1年『蜘蛛の糸』

高等部1年は、活字も読め、比較的理解力も高い生徒7名の集団です。

そこで、高等部らしく生活年齢にふさわしい作品を選びました。作者の「芥川龍之介」を知っている子どもは1名、この『蜘蛛の糸』という作品を知っている子どもはいませんでした。

まずはじめに、「芥川龍之介」について簡単に説明した後、マルチメディアDAISY図書を視聴しました。

つぎに、『蜘蛛の糸』の絵本の絵のみを実物投影機でスクリーンに投影して、司書教諭が実際に読み聞かせをしました。どちらも絵がリアルで、子どもたちは真剣にスクリーンを見ていました。

その後、子どもたちに感想を聞くと「カンダタはいけないと思った。自分ならみんなも助ける」と話の内容をほとんどの生徒が理解していました。マルチメディアDAISY図書と絵本の読み聞かせとどちらが良かったかと聞くと、全員がマルチメディアDAISY図書と答えました。読んでいるところがわかるからという理由が大半でした。

【担任の先生方より】

○マルチメディアDAISY図書のほうが注目、集中できていた。読んで

いる部分が強調されていて、どこを見たらいいかがわかりやすいようだった。

○子どもは黄色いハイライトの視覚支援がよいようだ。でも大人は疲れた。

○文字や文が強調されるので、本を読むことが苦手な子どもや、これから文(句読点や接続詞)を書く練習をする子どもには効果的だと思う。

△使用してみたいという気持ちはあるが、「いつできるか?」というところだ。

△DAISY図書だけでなく、やっぱり生の読み聞かせがいいなあという個人的な思いもある。

絵本の読み聞かせでは、音声を聞きながら、絵を見てお話の世界を想像することができ、絵が想像力を補完してくれます。マルチメディアDAISY図書では、活字が読めてハイライト表示にある程度ついていくことができる子どもであれば、自然にそこに目がいって、音声で聞いている内容を活字で確かめながら、時々出てくる絵の助けを借りて、お話の世界を想像することができると思いました。

ハイライト表示があることで、どのように区切って読み進めればよい

かがわかり、読みの案内をしてくれるという点がマルチメディアDAISY図書のよさであり、ハイライト表示がない文章やハイライト表示があっても音声があれば、この『蜘蛛の糸』の話の内容を理解するのはむずかしいだろうと感じました。

(4) 他の先生方からの感想

- 絵があることで、イメージを補完してもらえるのが良い。身近な生活の中になく物事や空想の世界、体験したことのないことを想像するということは大変むずかしいことだが、それを補完してくれるものだと思う。
 - 視覚、聴覚の両面から話の内容を理解したり、読み込むことがしやすいので、感情移入が通常の図書よりもしやすいことが多いように感じた。
 - 集中の持続に困難のある生徒がほとんどなので、話の長さも重要なポイント。
-
- マルチメディアDAISY図書のさまざまな工夫で原作の魅力や伝えたいことをできるだけ損なうことなく彼らにも伝えられるのだとしたら、このマルチメディアDAISY図書は大きな意味があると思った。

- 文字を読めない生徒が簡単な操作で物語を聞くことができる。
- 音声の流れる言葉のまとまりや文節が黄色く表示されるので、音読が苦手な生徒にとって、どのように区切って文章を読んだらいいかが分かる（意識する）教材としても参考になると思う。
- 物語に親しむきっかけとして使うだけでなく、音読のお手本の教材としてや言葉や文字を注視する教材としても利用してみたいと思う。
- 発達年齢に応じて、マルチメディアDAISY図書をうまく選んで活用していけば、読書につながるよききっかけづくりになると思う。
- 絵が入ることによって、文字だけが羅列してあるものより親しみが持てて見やすい。
- △場面ごとに絵と文字が入ると良いと思った。文字を大きくすると絵が見えなくなるのは良くないと思う。ページの音読が終わるまで絵は大きくすべてが見えているほうがいい。

成果と課題

各学級の子どもたちの実態になるべく合ったマルチメディアDAISY図書を選び、視聴したことで、どの学級でも興味をもって、集中してお話に親しむ様子が見られました。

また、今回の視聴をきっかけに、同じシリーズの絵本を借りたり、マルチメディアDAISY図書を視聴したりする生徒の様子が見られたり、実際に担任している子どもたちの課題に活用したりする先生もあり、マルチメディアDAISY図書は、読書へのきっかけづくりになると同時に楽しく文字を読んだり言葉を覚えたりする教材としても活用でき、さまざまな可能性があると感じました。

先生方からの感想も好印象のものがほとんどで、多くの教師が「今後使ってみたい」とのことでした。教職員によく知ってもらうこと、よさを実感してもらうことの大切さを痛感しました。

一方、絵本の読み聞かせがいいという感想もありました。やはり大人とやりとりしながら三項関係（第二者と第三の物を共有する）を豊かにしつつ絵本の世界を共有してお話に親しむ活動は大切です。

マルチメディアDAISY図書は一人

で読み進めることができるという点が利点ですが、このマルチメディアDAISY図書を活用して、やりとりしながら一緒に楽しんだり、今回のように学級の友だち全員で視聴したりする活用方法もいいのではないかと思います。

また、学校図書館の担当として、子どもたちの実態や興味・関心に応じたマルチメディアDAISY図書を選書するのに、もっと多くの本がマルチメディアDAISY化されていくとよいと思います。

毎日、学校図書館にやってきて、「この本を借ります」とうれしそうに本を借りていく子どもたちを見ると、障害がある子どもたちにこそ、読書の楽しさが味わえるマルチメディアDAISY図書のような個のニーズに応じた「資料」や読書への橋渡しをしてくれる「人」の存在が必要だと改めて感じます。知的な遅れがあっても読書に親しめる環境づくりが大切だと思います。